

山行計画

奥秩父(五月合宿)

期日 五月二日(日)～五月五日(水)
 係 天野 一郎 西多摩郡松原村一六八九
 申込み 四月二二日まで

集会計画

委員会 四月七日(水) 会事務所
 第一集会 四月一四日(水) 小金井婦人会館
 事業部会 四月一九日(月) 場所未定
 山話会 四月二一日(水) 国立公民館
 ※各集会とも一九時開催です。時間を大切に
 する為に定刻に集合のこと。

山行報告

1706 水晶岳(正月合宿)

期日 一月二八日(日)～一月二日(金)
 参加者 塚田CL 小川(四)SL 小堤SL 鈴木寺 出口(四)
 菅沼 甲山 安富 藤井 天野 花井(四)
 清水 岸田 花井(四) 以上一四名

報告

☆一月二八日(日) 晴 東京→大町→第五発電所
 準備体験が終る。少ないナード思える積雪、陽光の
 射す、ここ葛温泉が今合宿の出発点である。
 昨日、石油購入等のため先発した者、新宿で見送り
 を受け立った者早朝の大町にて合流。運び屋を引受け
 てくれた石川に別れマイクロバスにてここに来た。
 ダム建設によって作られた立派な道をただ歩く。長
 い長い七倉隧道を最初に水が流れ結水したのも含め、
 六つの隧道を抜けると濁であった。東沢出合は遠くな
 い。ダム工事によりすっかり変わったこの付近通過した

後、ルート偵察を二本出す。東沢出合上流にて本谷を
 渡る事に決定し地点に向う。掛けられている丸太橋で
 はチョット危いと丸太を追加、ルート工作の後、八米
 程の流れを全員がジャボルことなく渡りきる。

天幕は直ぐ着いた台地に三張。(小川 正義)
 タイム 葛温泉8:00→濁沢11:15→30→幕営地13:00

☆一月二九日(月) 晴 第五発電所→二〇五〇米(BC)

今日からはいよいよ取りつきである。A・B・C隊
 をそれぞれA隊、B・C隊との二つに分けて行動する
 ことになった。樹林帯をひたすらに登る。池のパーテ
 イーが、かなりトリースを残しているといか、進むの
 に少し楽である。高嶺山までつき上げてこの尾根
 はさほど急登ではなく、荷が重くもないが、ブッシュ
 がひっかかるせい、かなり抵抗がある。でもなだか、
 冬山とも思えない、天気の良いのでとても気が楽である。
 そのことを思っていて登っている内に、どこかの大学のパ
 ーティが下山して来た。それより更に登って行くとい
 日目の天幕地があったが、時間が早いのでほとんど登

りつめて行く。だいぶ登ってから高嶺山の頂下と思わ
 れる所に二日目の天幕地と定め、天幕を張った。

タイム テント場(五発電)6:45→高嶺尾根7:
 50→一九〇〇米付近11:00→二〇五〇米(BC)14:00

☆一月三〇日(火) 曇り BC→高嶺山→AC

OA隊 P小川(四) 甲山 安富 藤井
 稜線上までA隊を上げる。という変更後の予定に従
 い、A隊と、それをサポートするB隊がほぼ一緒に行
 動することになった。

高嶺山を越えると、風衝性の丈の低い樹林がしばし
 成層におおわれて、その上を歩く感じの所が出てくる。
 この、視野の開けてきた尾根を、いくつかのピークを
 越えながら順調に登って、二四八六mのピークに出た。
 この直下のコルには、ニパーティが専営しており、
 鹿兒島大パーティの残したと思われる赤布の付いた竿
 の群などもあって、大変人間臭い。

コルのすぐ上からは、もう森林限界で、矮形化した

植生やガレキの中を登っていった。風により、尾根ではさして雪は無く、急な西沢側には雪庇が出ている。

実際、コルから先はかなりの風で、登っている間はほぼ南西から定常的に吹いていた。

かなり視界の開ざされた中を稜線へと向かっていったが、時間的に日隊もそろそろ下らなければならなくなったところで、稜線手前ではあるが、緩斜地を利用して導管することとした。(甲山 隆司)

タイム BC6・3517・45、55―二四八六mピーク10・10―ACC12・35(入幕13・30)

〇二八〇〇米―二〇五〇米

P 塚田 鈴木 出口 花井 清水 時田
ザボートをしてきた荷を風に飛ばされないようにおろし、下山予定時間も過ぎていたのでA隊のテント設営は手伝わず早々に下る。地吹雪模様で顔に当たる雪のため目をあけているのがたいへんだ。おまけに視界も悪く、今登ってきたばかりなのに赤旗をたよりに下る。コルで風をよけひと思われる。ここからわずかの

く簡単に渡ることが出来る。取付きには無人のテントが一張、ボツンとあり、伝言が入口にあった。

小休止の後、軌道跡から高嶺尾根末端へ取付いた。最初の急登は雪が凍って滑りやすく歩みにくい。後は単独行の気分を味わいながらと言いたいところだが、次第に風雪模様となってきて、ゆっくりもしていかない。二千mを少し越えたところで我々のテントを見つければ、伝言には千八百m付近に幕営と書いてあったのに、などと思いつつも安心。皆が帰ってくるまで、のんびりテント内外の整理等しながら待つことにした。(小堤 仁)

タイム 葛温泉6・30―取付き8・45、9・30―高嶺尾根直下12・50

☆一二月三一日(晴)

〇A隊 水晶岳往復

行程が長いので早く出発する予定だったが、風は相変らず強く、視界も悪いので明るくなってから四名で出発する。ジャンクションピークに赤旗を立てて、縦走路に入る。雪はとばされて道がわかる。風が非常に

強いが、行きの上レールはほとんど消えラッセルを強いられる。それもほんの少しの間だ。二四八六mのピークを過ぎ森林帯に入るといままでの風がうそのように、目出帽がじゃまになる。途中テントを設営中のパーティに会う。この尾根も思っていたより多くの人が入っている。テントに着くと今日入山してきた小堤に迎えられた。(出口 久子)

タイム 下山開始12・40―二四六〇m13・30、45―BC15・00

〇後発隊 P小堤 以上二名 葛温泉―高嶺山直下

前夜、新宿発の列車で出発。車内は空いていてゆっくりに眠ることが出来た。大町ではバスの時間までに間があったので槍へ行くという単独の人とタフシーで葛温泉まで入った。

届けを済ませ、少し明るくなるのを待ってから出発。荷も軽く、雪の少ない道を快調に進み、最後の氷漬けのトンネルを抜けるのも高嶺尾根の取付きも見える瀧である。取付きへは偵察時に通った河原の道を使った。冬は高嶺川の水量も少なく、足を濡らすこともない。

強いが、雪はなく絶好のアタック日和である。

南真砂岳の分岐を過ぎ、一旦コルに下り、小さなピークをいくつも越える。右の東沢からの風は、小さな水の粒をふきつけ、眼が非常に痛い。少し大きく下って東沢乗越に出る。広い乗越には雪がなく、地蔵がボツンと立っている。ここからは、ほぼ稜線通りに岩稜や風に緊張しながら登り、広い雪面になると、水晶小屋に出た。風を避けて小屋に入りたいたのだが、戸が開かない。仕方なく石垣のかげで休んだ。

小屋から広い雪面を水晶岳に向う。この頃から風は止み、少し歩行も楽になる。平坦な雪面が終ると、水晶岳に続く岩稜が迫ってくる。東沢側に何本かの素晴らしい雪稜を落し、稜線には美しい雪庇がでている。どこを登るのかわからず不安になるが、古いアイゼンの跡をたどってゆく。岩峰は全部黒部削をまき、急な雪面をラッセルする。最後は、岩の部分へ移って水晶岳に立つ。展望は言うまでもなく素晴らしい。日本の高山地帯はすべて見る事ができた。

交信により、今日中に森林帯まで下るようにと連絡をうつ。早々に下山にかかる。素晴らしい展望に、写真

をとるため立ち止まりがちである。水晶小屋付近までくると、再び風が強くなり、追われるように下る。

テントにもどると、塚田と天野が待っていた。今日の撤収は、時間がおそいのでとりやめ、もう一晚稜線付近に泊ることになる。風と地吹雪からのがれ、テントに入るとようやく落ち着いた。(安富 芳森)

タイム テント場7・05―湯俣分岐7・45―水晶小屋10・10―35―水晶岳11・35―12・05―水晶小屋12・45―ジャンクションピーク15・35―テント場16・00

○二〇五〇m―野口五郎岳―二八〇〇m(A.C.)

P 塚田 鈴木(梅) 出口(丸) 小堤 清水 花井(梅)

天野

二〇五〇のB.C.を時田を残して出発。昨夜の小雪と風でトレイルは消えている。高嵐山を越えようと昨日入山したパーティの天幕が張ってある。まだ行動していないようだ。

九時四五分、アタック隊と交信するが全然交信できず、A.C.に残った天野が、昨日私がA.C.に置き忘れたきたトランシーバーで中継してくれた。

アタック隊との交信のあと、小堤と交信をする。彼らは先程別れた森林限界に日向ぼっこをしていたらしい。

雪が少なくて歩きづらい斜面を下ってA.C.にもどり、天幕内で休憩する。明朝の天幕撤収も強風に苦労することが予想され、花井(梅)がB.C.に下り、代りに塚田がA.C.に残ることにした。

鈴木(梅)、出口(丸)、花井(梅)の三名は強風を背に受けながら、A.C.をあとにした。塚田は二四六〇のコレ返彼らを見送りに下った。帰りのA.C.迄の登り、三回目であるが、非常にかつたらしい。(塚田 信正)

タイム B.C.7・00―森林限界9・30―10・00―二四六〇コレ10・20―30―A.C.11・15―25―野口五郎岳11・40―12・00―A.C.12・15

○二八〇〇米―二〇五〇米

P 鈴木(梅) 出口(丸) 花井(梅) 以上三名

A 隊の天幕撤収の手伝いの為、塚田と花井(梅)が交替し、下山にとりかかる。

昨日は、雪と風でまわりの景色もわからなかったが、

森林限界を越えると、風当りが強くなる。残念ながら新人二人はこの先無理なので、小堤と共に下りてもらう。

登降の少ない尾根を進むと二四八六m Pは直ぐで、ここを下ると二四六〇mのコレにつく。コレには三張幕営しており、ここからの槍ヶ岳はすばらしく、カメラのシャッターの音がにぎやかになる。

コレから稜線めがけてややきつくなった斜面は上から吹く風にさかたって登る。苦しい登りだ。しばらくでA.C.に着く。昨日はガスって周囲の様子かわからなかったが、稜線までわずかで、およそ二八〇〇mの地点だ。A.C.の天野と花井(梅)と合流し、出口(丸)をA.C.に残して野口五郎岳に向う。風は依然として強く、昨日からちようしの悪い花井(梅)はよく風によるけ、後の鈴木(梅)が大きな身体で彼女をささえる。尾根から右の力一ル状に入り、山頂めがけて登ると野口五郎岳だ。一時四五分の交信をすると、アタック隊は水晶岳山頂だという。あまりにも遅い。一度は今日中にA.C.を、二〇五〇のB.C.に下ろすと言ったが、少し無理となった。

今日は風が強いたので、槍ヶ岳をはじめとし、山々がすばらしい。

時々、風で行く手を阻まれもしたが、昨日の登りも一気に下ってしまふ。二四六〇mのコレ付近で見送ってくれた塚田とわかる。

樹林帯に入ると、先程まであんなに強く吹いていた風もつのように静まり、日ごしも春のよつて暖かい。途中、一本たてるまでもなく下り、小堤と新人三名の待つ天幕へ向かい、暖かい紅茶で迎えられる。

(花井 あけみ)

タイム 略

☆一月一日(雨) 晴れ 二八〇〇米A.C.―葛温泉

心配していた風も、それほど強いことなくテントの撤収を終えた。さて出発という時に運良く初日の出となり、全員すがすがしく一九七六年を迎える。苦労して登ってきた急な雪稜も見通しのよい中でどんどん下った。積雪はあいかわらず少なく、樹林帯に入るとシマクナゲの枝に極まされる。B.C.を過ぎてしばらく、アイゼンに付く雪のダンゴが気になってくる頃、本隊

共同装備一覽

	装 備 品 名	全数量	A隊(5名)	B隊(5名)	C隊(4名)
導管用具	天 藥	3	NO. 6	NO. 4	NO. 5
	ソエルト ザック	3	1	1	1
	雪 ス コ ッ プ	5	2	2	1
炊 事 用 具	雪 フ ラ シ	6	2	2	2
	石油 コンロ	6	2	2	2
	石油 ポンプ	2			
	ポリタンク(石油入)	12	5 ^l ×4.4 ^l ×2	3 ^l ×2	1 ^l ×4
	コップフェルセット	3 組	1 組	1 組	1 組
	お茶. 茶コ. 包丁. しゃもじ	3 ッ	1 ッ	1 ッ	1 ッ
	焼 網	3	1	1	1
	メ タ	3 箱	1 箱	1 箱	1 箱
	ロールペーパー	18 巻	6 巻	6 巻	6 巻
	テ ル モ ス 板	5	2	2	1
行 動 用 具	ベ ニ ヤ	12	4	4	4
	ザ イ ル	4	11 ⁰ ×1.9 ⁰ ×1	11 ⁰ ×1	9 ⁰ ×1
	細 負 引 子	20 m			
	ト ラ ン ジ ー バ ー	4		2	2
	赤 旗	3	1	1	1
	布 竿	40 枚			
	ラ ジ オ	20 台	1 台		1 台
	天 氣 図 用 紙	20 枚	10 枚		10 枚
	温 度 計	3 本	1 本	1 本	1 本
	そ の 他	旗 旗	1		
連 テ ー ル		2			
ガ ビ 二		2 巻	6 枚	6 枚	6 枚
薬 理 用 電 池		18 本			
予 備 一		1			
口 ナ		18 本	トランジスター 3 組	ラジオ 2 組	6 本

に追いついた。ここで藤井・天野が今夜の宿泊場所決定の為、先行することになった。取付点への下降は、尾根末端より手前で左の窪地をおりた。西沢の渡渉がややめんどうであったが、あとは単調な道路歩きだ。長いトンネルをいくつか抜けて葛温泉についた。

(天野 一郎)

タイム A C 7 : 00 取付点 H : 00 葛温泉 13 : 25

各係の報告

☆装備

今回も去年にひきつづき荷上げを行なわなかった為、装備の管理はやり易かったが、初日の荷の重さはかなりなものであった。人数が当初の予定より減ったため、二日目よりニパーティに再編成し、C隊の装備を取付点に残したことにより荷は相当軽くなり、距離をのばす事が出来た。妥当な策であったと思う。

装備で足りないものは特になかったと思う。反省点としては、石油のポリタンクに漏れるものがあった事。これについては、準備会でのチェックは必ずかしのので、普段使用して漏れるものは不良のマークをつけて倉庫

へ返すようにしてほしい。装備係でそれを修理するなり処分するなりします。

石油の量は毎年問題になるが、今回の使用量は二〇〇磅であった。半分以上余った理由としては、三隊を二隊に縮少したこと。日程が短縮されたことがあげられるが、四〇〇は多過ぎると思う。

石油購入については、四名に先発してもらい、手に入れる事が出来た。

なお、冬天NO6は張りづいたため、荒天中での設営はかなりの労力を要する。

最後に、貴重な装備をお貸しいただいた皆様へ感謝いたします。

☆医療

持参した薬品は別表の通りです。使用したものは、正露丸やユベラなど、ごくわずかであって、さいわいでした。

(出口 スチ)

※注：別表10頁にあり。

冬山合宿食料表

(朝夕は5人、行動は1人単位)

	朝	行 動	夕
12/28	-	-	S1
29	B1	L	S2
30	B2	L	S3
31	B3	L	S1
1/1	B1	L	S2
2	B2	L	S3
3	B3	L	S1
4	B1	L	-

予備食：ラーメン5、レジフィーズ5

アタック食：ハム1、ようかん1、ドライフルーツ2袋

れも現地での作業を減らすために、各自の消化分を各自が作り、持ってくる形にしてみた。このような形式についても、今後試みが為され、向うかの結論が出なければ、と思う。

前述のように、期間が短くなったので、その問題もなく、ほっとしている。(甲山、天野、清水)

内容・B1(うどん) うどん5、ペミカンB1、漬物

B2(ラーメン) ラーメン5、ペミカンB1、漬物

B3(おじやん) ワンタツチライス5、ペミカンB1、漬物

S1(カレー) カレー素、米45合、ペミカンS1、漬物

S2(ブタ汁) ミソ、米45合、ペミカンS1、漬物

S3(スパタン) スパタン素、米45、ペミカンS1、漬物

L(バターパン、アメ4、棒チーズ、ソーセージ)

チヨコレート各1、煮干

調味料他、緑茶、紅茶20パック、ウイスキー小1、

(一帯) コンソメ、シヨウユフ、おろしにんにく、

ミソ、砂糖、フリカケ、パック、

レモン2、アズキ缶、アリン素、

塩、モチノック

☆気象記録

合宿期間中の天候は別表の通りです。

一日目は風こそ冷たいものの春山を思わせるような日和である。二日目も日中は同じような天気でしたが夕方から雪が降り始める。天気図によると西高東低の

医 薬 品 表

内 服 薬

	薬 品 名	用 途
1	テトラサイフル	抗生物質
2	アクロマイシン	〃
3	ベリッフス	総合ビタミン
4	アスピリン	鎮痛、下熱
5	ユベラ	血行促進
6	新バンザ	風邪
7	正露丸	腹痛、下痢
8	三共胃腸薬	胃痛、消化不良、他

外 傷 薬

	薬 品 名	用 途
1	オキシドール	消毒
2	リバガーゼ	〃、殺菌
3	イソジン液	〃
4	ヨードチンキ	一般創傷
5	ゲルミチン	〃、しもやけ
6	チンキ油	マサド
7	ワリンパ	シツ薬

医 療 品

	品 名	数 量	品 名	数 量
1	バンキ付帯		6 バンコウ	
2	包	2本	7 体温計	1本
3	三角巾	2枚	8 ピンセット	1本
4	ガーゼ		9 ハサミ	1本
5	亜麻仁油		10 毛 拔	1本

☆食料

隊の者が皆合宿前に何かしらの用事があって、充分に計画を練れなかったが、打合せ会で参加者の協力を得ることになってきたし、また実際の行動も早めに終わったので、さして現地で困るようなことはなかった。

ペミカンを全朝夕に利用したのは、現地での搬送を防ぐことと、コンパクトにパックングできて、荷上

げをしない計画において、有効にボツカができることの二点を考えることである。作る手間の問題や、重量的にはその変化のない点など、反省会で触れたように、負の要因もある。残念ながら、今回の実施でもこの問題に関しては結論的なことは言えなかったが、前述の目的は達し得た。

金銭的な面から、行動食を食パン主体としたが、こ

冬型天気が崩れ、日本海、太平洋に低気圧が発生する。三日目、雪が降り続き稜線上は強風と吹雪で何でもバリバリに凍ってしまふ状態である。四日目、雪は止んでいたものの、相変わらず雲空が重苦しい。昼頃より回復し陽光が射し始める。五日目、思わず「下山するのがおしいね」という言葉が口をひいて出てくるような曇一つない抜けるような青空であった。

気象

日	時	場所	天気	風向	風力	気温
12/28	6:00 12:00 (B) 18:00	大町駅 (BC) 第5発電所	① ○ ○	— N N	1 1 2	— -3° -6°
12/29	6:00 12:00 (月) 18:00	1900m付近 2040m B.C	○ ① ⊗	N NW N	1 1 2	-6° — —
12/30	6:00 12:00 (火) 16:00	2040m B.C 2800m付近 2040m B.C	⊗ 吹雪 ⊗	NW N N	2 3 2	-11° — -12°
12/31	6:00 12:00 (水) 16:00	2040m B.C ッ	⊗ ① ⊗	N N N	2 2 1	-8° — -11°
1/1	6:00 12:00 (木)	2040m B.C 第5発電所	○ ○	N N	1 1	-7° —

一時的に天気は崩れたものの、全体的に大陸からの高気圧の影響をうけ穏やかな五日間であった。保の不慣れで温度を確実に測る事ができなかった事を反省致します。又御協力頂きました天野、清水各氏に御礼申し上げます。
(時田)

☆感想

清水 彦 夫

昨年確か遠くから眺めて「あれが北アルプスか」と思っていたはずで、まさか冬の北アルプスに登ろうとは夢にもは言わないうまでもまだ遠い先のように思っていたのに。
冬山合宿に参加していろいろ思ったが、冬山と雪山の違いはよくわからなかった。今までのぼくの知っていた雪山は、かざり程度の雪があっただけで、その雪の中でもがき苦しむようなことはなかったし、突風というものがあんなものとは思っていなかった。重たい荷物に押しつぶされながら歩いていたりして決して寒な合宿ではなかったが、自分にとってアラスになったものがたくさんあったし、深く考えれば冬山に行くということにはいろいろあるのだろうが、山が好きで

行って来て楽しければ結局それが一番いいのではないだろうか。ぼくの価値観で見ればそう見える。
又山の感想なんてあるけど言葉にはしがない物だろう。合宿も終り、入会してそろそろ一年になるが、自分にとっても何かと難しい季節になって来た。

☆反省会記録

一月一日、濁温泉・仙水館で反省会が行なわれた。全体的行動面についての反省、各係からの報告、反省と楽しい中にも有意義な意見が出された。
米行動面について

交通関係では列車の指定券が取れた事、マイクロボスの手配が良かった事等から比較的スムーズに現地到着ができた。又荷の運搬も車を利用したので個人的には楽であった。しかし今後車を利用する事が多くなるので現地での連絡場所を確保しておく必要があるとの意見が出された。又用具(ツェルト、トランシーバー、メモ用紙)の使用が確実でなかった。
メンバー変動に際して装備分担表が活用され、分担

がスムーズに行なわれた。石油容器に不良の物があり、石油もれがあったので事前にチェックすべきであった。今回から使用したゲンゾウ液容器は口がしっかりしていて安心であった。石油ポンプがあげられていなかった。ツェルトが足りなかった等の意見があった。
米食糧について

ペミカン中心の献立がたてられたが、時間的にも、料理するうえでモロスが少ない。又、なま物を使用した時よりゴミの量が少なく良かったのではという意見と、ペミカンはあくまで非常時食であって、なま物を利用できるものは最大限利用すべきであるという二つの意見が出されたが、この問題はこれからいろいろな角度から検討すべきであるという結論であった。
(時田)

☆番外及び会計係

乗車券や指定席券の支払いが、全員滞っていたので、会計の方は大変でしたが、皆様のご協力と天候のおかげで、温泉でゆっくりすることもでき、ほっとしております。荷物運搬にあたっては、石川さんに多大のご

協力をいただき、乗車の際非常に助かり深く感謝しております。

又、ごし入れをして下さった方々、どうもありがとうございました。

(花井 あけみ)

☆合宿を終えて

塚田 信 正

会 計 報 告

○ 収 入	
合宿費	13,000×13=169,000
寄 付	6,000×1= 6,000
食糧処分	8,000
	5,000
	188,000
○ 支 出	
食糧費	81,582
装備費	9,758
雑費	32,265
返 金	(1×4,930) 64,090
寄 付	(ヒュッテハ) 305
	188,000

○出発直前に参加を取り止めた者一名は合宿費として六〇〇〇円負担してもらった。

○雑費には、片道交通費、マイフロバス使用費を、返金の中には、温泉の宿泊費を含んでいます。

(花井 あけみ)

かわらず、なせもう一度新人に登頂のチャンスを手えなかつたか。という質問が反省会において出された。

合宿に参加しなかつた会員も計画より早く下山し、逃につかっている報告を読み、疑問を持っている方も多いかと思う。昨年の反省会でも同様の意見が出された。

今合宿の目標はタイトルで示してある通り、あくまでも水晶岳登頂にある。目的を達したならば、さっさと下りる。これがOMCが今迄とってきた道である。

わたくしの考えとしては、新人の合宿は荷上げをしながら雪になじむことではないかと思う。今迄この方法で非常に効果が上がっている。その証拠には、冬トシでは一〇〇二〇mの雪でもたついていた人でも、冬山合宿の帰りに相対しつかりとした歩き方になっている。一年会員で雪になれ、二年会員で、荷上げ、ルート工作の主力となり、三年会員で別動隊に入る。これが山岳会のエリートが歩む道ではないかと思う。(しかし、最近の会員は山行数から見て、このエリート・コースを取るにはあまりにもたよらない気がする。)

装備を大町迄車で運んでくれた石川、列車の指定席を取ってくれた小川(徳)両氏をはじめ、見送り、差し入

こ二数年、冬山合宿において、縦走隊、又はウアリエーション・ルートからのアタック隊のように、別動隊を組んできたが、今合宿では日教と参加者の関係からOMC独特の変則極地法一本にしぼった。その為、参加者が少なかったにもかかわらず、非常に強力なパーティとなった。その上、積雪が少なく、既に数パーティが入山しており、天候にもめぐまれ、われわれとしてはいささか物足りない感じのする合宿であった。しかし、いつもこのようであるとは限らない。北アルプスの中央部であり、一たび天候がくずれ、積雪が多かつたならば、相当苦勞したであろう。

当初全員が野口五郎岳又は水晶岳に登頂する計画であったが、大自然はそこ迄甘くなく、残念ながら、新人諸氏にはA.C.設営のサポートが背一っぱいであった。しかし、今回のサポート隊は今迄の合宿の中で、一番サポート隊らしかったように思える。

一月二日A.C.の隊収の際には風は弱くなったにもか

れをしてくださった方、大切な装備を買してくださった方、どうもありがとうございました。

1710 小川谷周辺の沢

期 日 二月七日(土)～八日(日)

参加者 安富CL 小川(徳)SL 石川 以上三名

報 告

☆二月七日(土) 晴 滝上谷下部 安富

朝入山。二日ほど前に降った雪が二〇センチ位ある小川谷林道を歩き、滝上谷出合にツエルトを張って入谷する。

氷は全くなく、雪でかくされたゴロ口にてこずる。大小屋の滝まで来るが、少しも氷っていない。左壁にボルトが一本打ってあり、そこから少し登ってみたか向つ側に降りられるかどうかわからないので止める。少しもどって左から大きく高巻く。

滝の上のワサビ田の所で進行を打ち切り、仕事道(左岸をたどって出合にもどる。 (安富 芳森)

タイム 東日原9・35 滝上谷橋川・05 40 大木